

「漸次性」を表す時間副詞に関する一考察

台湾・淡江大学日本語文学科 江雯薰

1 はじめに

現代日本語には、「だんだん」「しだいに」「じょじょに」「どんどん」「ますます」（以下で五語と称す）のような時間を表す副詞がある。これらは、仁田（2002）では＜進展様態型＞に属する時間副詞として取り扱われている。辞書類においては、たとえば、『基礎日本語辞典』（1989）¹では、次のように説明してある。

「だんだん」：物事の状態が少しずつ順を追って変わっていくさま。

「しだいに」：「次第に」も「だんだん」と同じ意に使われる。

文章語ゆえ、やや固い表現、丁寧な言い方に使われる。

「じょじょに」：ゆっくりなさまを表すが、これは変化を前提とした語。ゆっくりと変化していくような場合に用いる。

「ますます」：“増す上にもさらに増す”で、程度がさらに著しく高まり増していくことを表す。

「どんどん」：状態の変化や、動作・動きなどが盛んによく進むさまに用いる。「だんだん」と共通する文脈は、状態変化に根ざす表現に限られる。

以上の説明を見ると、これらは、ある出来事の状態や変化や動作が次から次へと続く様子、つまり進展的な事態を表すという点で共通していると言える。

このような進展的な事態について、次のような二つの側面を表すことができる。

(1) 病気がしだいによくなっていく。（作例）

(2) 学生がどんどん教室に入ってきた。（作例）

(1)は、病気の状態が程度的によくなっていくことを表すものである。(2)は、複数の学生が次々に続いて教室に入ってきたことを表すものである。前者は単一の主体が質的な進展を表す場合であるが、後者は複数の主体が量的な進展を表す場合である。このように、質的な進展にしても、量的な進展にしても、本発表では「漸次性」を持つとし、「だんだん」「しだいに」「じょじょに」「どんどん」「ますます」を「漸次性」を持つ副詞とする。

この五語の置き換えを手掛かりにしてみると、次の(3)(4)になる。

(3) 二階へ上って行くと、その匂いはますます{○だんだん／○しだいに／○じょじょに／○どんどん}ひどくなって来た。（湖畔）

(4) 戦争はすんでいるけれど、八津はやっぱ戦争でころされたのだ——。母がそうだったとき、大吉はきゅうには意味がのみこめなかったが、だんだん{○しだいに／○じょじょに／*ますます／*どんどん}わかってきた。（瞳）

(3)は、五語のいずれにも置き換えることができる例であるが、(4)は「ますます」「どんどん」に置き換えられない例である。このことから、「ますます」「どんどん」は「だんだん」

「しだいに」「じょじょに」と区別されており、相違点があると言える。本発表では、構文的に五語の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究

五語の先行研究について、仁田(2002)と宮城(2008)は構文的に述べるものであるが、森田(1989)は五語、飛田・浅田(1994)は「どんどん」以外の四語を、木島(1999)は「ますます」、小西(1999)は「どんどん」を意味的に述べるものである。このようにみると、先行研究の多くは、五語が表す意味の違いを中心に記述したものであると言える。本発表では、構文的な異同を補足するため、以下からはそれに関する先行研究を取り上げることにする。

仁田(2002)はそれらを「時間の展開に従って、事態が進展していき、その進展とともに、事態の内実である変化が漸次的に拡大していくことを表しているものである。変化のあり方という点において、様態の副詞的でもある。また、変化の程度性の拡大という点において、程度量の副詞的でもある。これには、「次第に、次第次第に、だんだん(と)、徐々に、おいおい(と／に)、漸次、…」 「いよいよ、ますます、どんどん、少しずつ、…」 などがある。前者は変化の進展性を表し、後者は変化の程度性拡大に関わっている。」としている。

宮城(2008)は、進展表現の分類と副詞の語順について論究しており、「進展副詞の語順の傾向の規定には、構文の構造の影響もある」とするものである。また、「じょじょに」「どんどん」は、「変化や動作について修飾」する副詞であるが、「ますます」「しだいに」「だんだん」は「出来事全体を修飾する」副詞である、ということも述べている。

本発表では、文末の述語における特徴や、五語が表した事態が実現されたかどうか、主体が単一であるか複数であるか、変化は質的であるか量的であるかといった観点からそれぞれの語が用いられる文を考察する。

3 文末の述語における特徴

五語における文末の述語をみると、次のような特徴がある。

A. 形容詞((5))や形容動詞((6))や静態動詞((7))は「ますます」の文末にくることはできるが、他の四語の文末にくることはできない。

前掲の(3) (「二階へ上って行くと、その匂いはますます{○だんだん／○しだいに／○じょじょに／○どんどん}ひどくなって来た。」)のように、時間的限定性を持つ場合は、五語のいずれも用いることができる。このことから、「ますます」も、まず時間的限定性を持つ文に用いられると言える。しかし、以下のように、「ますます」には、他の四語と異なる性質がある。

- (5) 葉は厚く強い光沢があり、太陽の光を受けてますます{*どんどん／*だんだん／*じょじょに／*しだいに}美しい。(http://www.tamagawa.jp/features/nature/bn200608._html)

- (6) 「あなたはミス?それともミセス?」美智世があまりにも美しいので思わず見とれる

光太。「ミスです」美智世が笑う。「そいつはますます{*どんどん/*だんだん/*じょじょに/*しだいに}素敵だ」(女ざかり)

(5)の「美しい」と(6)の「素敵だ」は特性を表すものである。これらは、「ますます」とは共起できるが、他の四語とは共起できない。また、

(7) 情勢を見る目がますます{*どんどん/*だんだん/*じょじょに/*しだいに}いる。(http://plaza.rakuten.co.jp/AmandoSlog/diary/?ctgy=1)

(7)の「いる」は必要性を表し、工藤(1995)で言えば、いわゆる動作・変化を持たない「静態動詞」である。このような動詞を用いると、時間から解放されており、時間的限定性を持たない文となる。このような場合は、「ますます」しか用いられない。

以上から、「ますます」は時間的限定性を持たない場合にも使われることで「どんどん」「だんだん」「しだいに」「じょじょに」と区別されていると言える。

B. 述語が「状態性」を持つ場合は、「ますます」としか共起できない。

(8) タイムライン(年～月～日～時等による時系列表)は、ユーザインタフェースとして最近ますます{*どんどん/*だんだん/*じょじょに/*しだいに}人気がある。(http://tech.newzia.jp/keyword/Google%20Labs)

(9) 私達の作品がフィジカルで知的に適切なポジション取りするように私達に再び強制するような状況に、私達はますます{*どんどん/*だんだん/*じょじょに/*しだいに}いる。(http://orange.ap.teacup.com/kenjiido/495.html)

「ある」「いる」は存在を表す静態動詞であるが、(8)では「人気がある」は「人気が出てきた」、(9)では「私達はある」は「私達は再び強制するような状況に置かれている」と解釈できる。この場合の、「ある」「いる」は、「ますます」としか共起できない。

このように見ると、「ますます」には、文末の述語が「運動性」を持つものでなければならない、という特徴はないが、それ以外の四語にはあると言える。

C. 述語が「運動性」を持つ場合は、五語のいずれも変化を表すものが来ることが多い。

(10) 私はだんだん取り乱して、涙まじりの金切り声を張りあげ始めてしまいました。
あなたの沈黙が、ますます私を逆上させていったのです。(錦繡)

(11) …(前略)…、女のアパートで同棲したが、女がときたま外泊するので、それが原因で二人はだんだん疎遠になった。(冬の旅)

(10)の「取り乱す」は動作を、(11)の「なる」は変化を表す動詞である。これらのように「運動性」を持つ動詞が五語の文末に来ることができる。それぞれの使用頻度をみると、次の表〔1〕のようになる。

述語 副詞	動作性	変化性	合計
だんだん	32 例(全体の 13.50%)	205 例(全体の 86.50%)	237 例
じょじょに	76 例(全体の 35.35%)	139 例(全体の 64.65%)	215 例
しだいに	76 例(全体の 27.05%)	205 例(全体の 72.95%)	281 例
ますます	58 例(全体の 24.37%)	180 例(全体の 75.63%)	238 例
どんどん	82 例(全体の 33.06%)	166 例(全体の 66.94%)	248 例

表〔1〕で示されているように、五語は何れも変化を表す動詞が文末に来ることが多いことから、五語によって表される進展的な事態の多くは変化性をもつものであると言える。

D. 五語は「ていく」「てくる」「ている」「つつある」のような変化の進展を表すアスペクト形式と共起しやすい。

五語は「ていく」「てくる」「ている」「つつある」といったアスペクト形式と共起する頻度をみると、次の〔表2〕になる。

アスペクト形式 副詞	ている	ていく	てくる	つつある	合計
だんだん	5 例(全体の 3.33%)	33 例(全体の 22%)	111 例(全体の 74%)	1 例(全体の 0.67%)	150 例
じょじょに	22 例(全体の 23.16%)	35 例(全体の 36.84%)	33 例(全体の 34.74%)	5 例(全体の 5.26%)	95 例
しだいに	12 例(全体の 9.52%)	57 例(全体の 45.24%)	53 例(全体の 42.06%)	4 例(全体の 3.17%)	126 例
ますます	20 例(全体の 31.75%)	13 例(全体の 20.63%)	28 例(全体の 44.44%)	2 例(全体の 3.18%)	63 例
どんどん	31 例(全体の 19.62%)	104 例(全体の 65.82%)	23 例(全体の 14.56%)	0 例(全体の 0%)	158 例

〔表2〕から、共起できるアスペクト形式の中で、「つつある」は他の形式より共起しにくいと見られる。それは、徐々に状況が変化することを表す「つつある」には、文体的にかたく、書き言葉的であるという特徴があるからである。

また、「だんだん」では「てくる」との共起が、「どんどん」では「ていく」との共起が、他の形式より多く使用されているということも見られる。「てくる」「ていく」のどちらを選ぶかは、どの時点に視点を置くかによって決まる。変化した後に視点を置く場合は「てくる」、変化する前に視点を置く場合は「ていく」を用いる。このことから、「だんだん」の多くは変化した後に視点を置くことを表すが、「どんどん」の多くは変化する前に視点を置くことを表す、ということが言える。

4 五語が表した事態が実現されたかどうかといった観点から

五語の文末には意志、勧誘、命令といったモダリティ表現が来ることができる。

(12) {○だんだん／○じょじょに／○しだいに／○どんどん／○ますます}成績を上げよう。(作例)

(13) 事業拡張のため、{○だんだん／○じょじょに／○しだいに／○どんどん／○ますます}仕事を一緒に増やしていこう。(作例)

(14) {○だんだん／○じょじょに／○しだいに／○どんどん／○ますます}動きなさい。(作例)

(12)～(14)では、意志、勧誘、命令といった表現は実現していない事態を表すことで共通している。これらが五語の文末にくると、非文とならない。このことから、五語は未実現な事態を表すことができると言える。ただ、そのような未実現な事態は、発話時より前に既に起こって、これからも続いていく、という意味を表す。つまり、その実現はすでに予

測されていることである。このようにみると、五語によって表されている事態は、未来の時点において実現することであるが、その実現は発話時点においては既に起こっていると話し手が認識していると言える。

5 主体は単一であるか複数であるかといった観点から

主体から見ると、単一の場合((15))もあれば、複数の場合((16))もある。

(15) 「では、家まで送るよ」「いや、ひとりで帰る」理一はにべもない返事をした。

そして彼はどんどん歩いた。(冬の旅)

(16) 二作目、三作目って書き進めて行く内に、どんどん、素敵な読者がついてくれて、受賞した瞬間以上にそのことが嬉しかったね。(足)

(15)では、「歩く」という動作が単一の主体である「彼」によって、繰り返して行われる。それに対して、(16)では、「ついてくれた」は複数の主体である「素敵な読者」によって行われる。進展的な事態の主体は単一であるかどうかをみると、次の〔表3〕になる。

主語 副詞	単一の主体	複数の主体	合計
だんだん	191 例(全体の 80.59%)	46 例(全体の 19.41%)	237 例
じょじょに	165 例(全体の 76.74%)	50 例(全体の 23.26%)	215 例
しだいに	229 例(全体の 81.49%)	52 例(全体の 18.51%)	281 例
ますます	228 例(全体の 95.80%)	10 例(全体の 4.20%)	238 例
どんどん	163 例(全体の 65.73%)	85 例(全体の 34.27%)	248 例

〔表3〕から、五語のいずれも単一の主体の場合が多く用いられていると見られる。また、複数の主体の場合は、それぞれの使用頻度を見ると、「ますます」は単一の場合が目立つが、「どんどん」は他の四語より多く用いられることが言える。

6 変化は、量的であるか、質的であるかといった観点から

進展的な事態は、どのような側面で進展するのかといった観点からみると、量的に捉えられる場合((17))もあれば、質的に捉えられる場合((18))もある。

(17) 二度目の春校庭の木には、緑色の柔らかな葉っぱが、どんどん生まれていた。花壇の花も、咲くのに大忙しだった。(窓ぎわ)

(18) 街はどんどん老朽化していく。修復しても次から次に壊れていく。(冷静)

(17)の「葉っぱが生まれていた」は量的な変化として捉えた事態であるが、(18)の「街は老朽化していく」は質的な変化として捉えた事態であると思われる。その変化は量的であるか、質的であるかは程度副詞の「非常に」と共起できるかどうかによって判断するのである。それは、程度性を持つ情態性を修飾する「非常に」が質的な変化の表現にのみ生起することができるからである。よって、文脈を考慮して五語と「ていく」「てくる」などの文末アスペクト形式を除いた動詞句に「非常に」が生起することができるか否かで質的な変化として捉えられた表現であるか否かを判定することができる。その基準で五語の表す進展的な事態をみると、次の〔表4〕になる。

	質的变化	量的変化	合計
だんだん	147 例(全体の 62.03%)	90 例(全体の 37.97%)	237 例
じょじょに	89 例(全体の 41.40%)	126 例(全体の 58.60%)	215 例
しだいに	213 例(全体の 75.80%)	68 例(全体の 24.20%)	281 例
ますます	158 例(全体の 66.39%)	80 例(全体の 33.61%)	238 例
どんどん	91 例(全体の 36.69%)	157 例(全体の 63.31%)	248 例

〔表 4〕から、量的変化の場合は「どんどん」「じょじょに」の使用頻度は他のより高いが、質的变化の場合は「しだいに」「だんだん」「ますます」は他のより高いと言える。

7. まとめ

これまでの考察により、五語は、時間的限定性を持つ文に用いられること、変化性を持つ進展的な事態が多く用いられること、「ていく」「てくる」「ている」「つつある」のような変化の進展を表すアスペクト形式と共起しやすいこと、実現された事態を表すこと、単一の主体の場合が多いことで共通している。それに対して、「ますます」は、時間的限定性を持たない文にも用いられること、「状態性」を持つ述語も文末に置かれることで他の四語と異なっている。また、「どんどん」は、複数の主体の場合と、事態が量的変化を表す場合は、他の四語のより多く用いられる。このようにみると、「ますます」「どんどん」は構文的に他の三語と大きく異なっていると言える。

以上を元にして、更に意味的な違いを明確にする必要があるので、今後の課題とする。

参考文献

- 木島雅夫(1999)「「ますます」と「いっそう」についての一考察」、『日本語教育論集』8, 姫路独協大学。
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』, ひつじ書房。
 ———(2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」, 『日本語文法』2 巻 2 号, くろしお出版。
 小西正人(1999)「変化述語をもつ「どんどん」文の意味からわかる「動詞固有の意味」と「文の意味」, そしてその関係について」, 『言語学研究』17 - 18 号, 京都大学言語学研究会。
 仁田義雄(2002)『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』, くろしお出版。
 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版。
 宮城信(2008)「進展表現の分類と副詞の語順」, 『日本語文法』8 巻 2 号, 日本語文法学会, くろしお出版。
 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店。

使用テキスト(例文の文末には、実例の場合は出典を記し、作例の場合は「作例」と表記し、インターネットで調べた例の場合はそのホームページアドレスを書く。)
 足＝山田詠美『ひざまずいて足をお舐め』新潮社(1992), 女ざかり＝森瑤子『女ざかり』角川書店(1994), 湖畔＝赤川次郎『幽霊湖畔』文藝春秋(1991), 差し指＝向田邦子『女の人差し指』文藝春秋(1985), 瞳＝壺井栄『二十四の瞳』(CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊)新潮社(1995), 窓ぎわ＝黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社(1994), 冬の旅＝立原正秋『冬の旅』(CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊)新潮社(1995), 冷静＝江国香織『冷静と情熱のあいだ』角川書店(2001)。